

日中の暑さが鬱陶しくなり始めた五月の頭。日ごとの寒暖差もあるが、暑い昼間が増えてきた気がする。汗でシャツが張り付いて気持ち悪い。はやく夏服に移行させてくれれば良いのに。

エレベーターに乗り込んだ俺は、周りに誰もいないのをいいことにスラックスからシャツを引っ張り出す。パタパタとシャツを揺らして服の中に風を送り込んだ。が、こんなもので汗は引いちゃくれない。

今の住まいがある階に到着するなり、俺はエレベーターから飛び出て家に入った。

「アーあっちい〜！」

靴をほっぽって台所に向かう。

ちょうど叔父がコーヒーを淹れていたところだった。大ぶりのステンレスマグカップにコーヒーがたんまり注がれていて、キンキンに冷えていそうなソレに飛びつきたくなる。

「瑞希くん、『ただいま』は？」

「……だる。ただいまただいま」

「はい、おかえりなさい」

叔父こと祥助さんは、穏やかな口ぶりとは反対に、意地悪

そうにつり上がった目をしている。そのつり目を細めて、「おかえりなさい」と微笑むのが胡散臭くてゾッとした。優しげな表情作りに隠されたその変態性を、嫌というほど俺は知っているからだ。

ちょうど一年前、父親の海外赴任が決まった。

日本語以外話せないし、友人たちとも離れたくない。というかもう高校生なのだ。親がいない生活なんてラッキーではない。

そう思って日本に残ると言ったのだが、気づけば俺はこの叔父の家に居候させられていた。祥助さんはどこかの大手企業でシステムエンジニアをしているらしい。一人暮らしにしては広い家に住んでいるし、小遣いだってそこそこくれる。

だけど在宅でずっと家にいるから、思っていた自由は俺にはなかった。

——それに祥助さんには、大人として、かなり問題がある。

俺が冷蔵庫を開けると「手洗いうがいは？」とさっそく小言が飛んできた。

面倒なので舌打ちだけ返してから流し台で手を洗う。

「洗面台に行ってほしいんだけど」

「洗えばいいんだろ、洗えばよ」

「食器を洗う場所に外からの汚れを持ち込んでほしくないの」
「ハイハイ気をつけまァーす」

一応口も濯いでから、もう一度冷蔵庫を開ける。

いや、そういえば昨日祥助さんがアイスを買ってきていなかっただろうか。

冷蔵庫をしめると、勢いをつけすぎて大きめの音がした。

「静かにしめて！」

最下段の冷凍庫を開け直す。

パッと見たところアイスらしきものはない。

作り置きが詰め込まれたタッパーの下まで確認してみるが、それらしきものはなかった。

「なァ昨日買ったアイスはァ？」

「アイス？ 俺が食ったけど」

溜め息ひとつ吐いた祥助さんは、当たり前みたいに言い捨てた。

「ハァー!? 俺食ってねえのに！」

「瑞希くんのじゃないし。俺が俺の金で買ってきた俺のアイ

スだから、いつ俺が食べたっていいでしょ」

「はあー……」

ありえなくてついアホみたいな声が出た。

普通、アイスを買ってくるなら同居人数分買ってくるものじゃないのだろうか。

それに昨日「暑いからアイス買ってきちゃった！」なんて自慢してきたくせに！

すっかりアイスの口になっていたから、裏切られる結果になって体温が上がってきた気がする。

「使えねえ～……、つかありえねえ～……」

仕方ないから麦茶で我慢するしかない。

苛立ちに任せて足で蹴って冷蔵庫を閉めた。

また、ボタン！と大きめの音がする。

それからすぐ、コン、と台所の台に物が置かれた音がした。

静かな音だったのに、なぜだかハッキリ聞こえてきて、台所の空気がピリリと張り詰めたものに変わる。

おそろおそろ振り向けば、祥助さんが冷たく鋭い吊り目で俺を見ていた。さっきの、コン、って音はマグカップを置く音だったらしい。

「なんで足で蹴ったの？」

静かに言いながら、開けたばかりの冷蔵庫を閉じられた。

ただでさえ暑いのにすぐ横に立たれて、ぶわりと汗が噴き出していく。体温は上がっているはずなのに、流れる汗がやけに冷たかった。

「そ、それは」

なんと言いつしよと考えているうちに――べろり。

こめかみに伝う汗を舐められた。

「ヒッ」

「しょっぱ」

舐められた場所がぞわぞわ総毛立っている気がする。

これだから俺は、祥助さんが嫌いなのだ。いけすかなくて冷たい綺麗な顔をしているくせに、ありえないくらい変態だから。

「蹴っちゃダメだよね」

スラックスから引っ張り出したシャツの内側に、するりと

硬い手が入り込んでくる。指が臍のあたりを撫でたかと思えば、そのまま下へ。ベルトにつっかえて止まった手をそのままに、祥助さんが俺の顔を覗き込んでくる。

「外して？」

「……変態がよ……！」

しかし俺には、大人しくベルトを外す以外の選択肢が無かった。この家では祥助さんが絶対だ。逆らえばひどい『おしおき』が待っている。

ベルトを外す手が震えた。植え付けられた、暴力的なまでの快感の記憶を全身で覚え込まされている。ドキドキと胸が鳴って、息が荒くなるのがバレないように口を閉じた。

俺がベルトを外すとすぐ「いいこ」だなんて言って、パンツの中に手を忍び込ませてきた。祥助さんの手は止まることなく恥肉をふにふにと指先で押し撫でながら、合間のクリトリスをきゅむ♡と指で挟み込んだ。

「～～ッ」

甘い痺れが腹から脳天までを一気に駆け巡る。

快楽に慣らされた体はたったこれだけで震えて、つい冷蔵庫に手をついた。

とぷとぷと溢れ出す愛液がパンツに染みていく。指の腹が先っぽをすりすり撫でてきて、逃げるように腰を引けば祥助さんの体に阻まれた。

「んっ……、ふ、んう……ッ、う」

愛液を指でさらって、クリトリスに撫でつける。

くちゆくちゅと音を鳴らしながら、根元から上下に馴染られ始めた。

「んううッ！ ふ、……ッん、く、うう……ッ♡」

「どうしてそんなに足癖わるいのかなあ」

くちゆくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ……♡

愛液ごとかき回されて、クリトリスがじんじん熱く滾っていく。

「どうして？」

「そとが、あ、あつくてっ、いらいらして、え……ッ」

「うん」

「っ、つい、蹴った……、あ……、あっ、ンンッ♡」

「蹴っちゃダメでしょ」

ぎゅむっ♡

昂ぶったクリトリスをつまんで引っ張り上げられる。

「インッ!?♡」

目の前がパチンと弾けて、絶頂が襲いかかってくる。

しかし祥助さんの指は止まることなくクリトリスをこね続けてきた。

「あ、あっあッあッ♡ イッた♡ いま、あ、ああッ!♡ んううッ!♡」

「わるいコトしてなに勝手に気持ち良くなってるの？」

「それは、っ、だって……ッ! 祥助さんが、あ、ッ、ん、んむっ♡」

振り向かされてそのままキスされる。

反射で舌を伸ばしてしまったら、そのままぢゅるりと吸い上げられた。

気持ち良くて頭の中がビリビリ痺れていく。

「ん、ふっ、うう……♡ んっ、く、うんッ♡」

上手に呼吸ができなくて、全身が快楽に支配されていく。

カクカク腰が揺れて、また絶頂が近づいてくる。

無意識のうちに、足を開いて祥助さんが手を動かしやすいようにしていた。

根元から先端を何度も擦りあげられる。

「ふっ、んっ、イク、っん、んんっ！♡」

ぞくぞくぞくッ……♡

せり上がってきた快感の波が絶頂を覆う。

全身を跳ねさせながら、俺は祥助さんの手に潮を吹きかけていた。

「んううううッ!!♡♡」

パンツが吸いきれなかった潮がぼたぼた床に落ちていく。

祥助さんの体が俺から離れていくと、体を支えきれなくて床にへたり込んでしまった。びちゃ、と汚い音がする。

祥助さんは濡れた手で俺の頭をわしゃわしゃ撫でると「自分で掃除できるね」と優しく言いつけてくる。この野郎。なんで俺が、と思うが、言い返したところで余計にひどい目に遭うだけだから、今のところは黙ってやった。

まだクリトリスがじくじく疼いている。身じろげば、パンツに先端が擦れてまた愛液がこぼりと溢れた。

ポルチオまで届くディルドが膣全体を絶え間なく振動で刺激してくる。太さはないのに膣壁がぎゅうぎゅうとディルドを締め付けるから、俺の体は快感を強制的に拾わされていた。

U字型のディルドの片側は小さなカップになっていて、膨れたクリトリスを覆っている。クリトリスの先端を、とちゅとちゅとちゅ♡と断続的に優しく叩くような刺激が続いていて、俺は助手席で腰をくねらせていた。

「ふっ、ううう♡ ゾッ、ぐう、う♡ ううんッ♡」

「運転しにくいからあんまり動かないで」

「じゃ、あっ♡ コレとめろよっ!!」

祥助さんが「やっぱりアイスもう一個食べたいな」と言い出したのは夕飯のあとのことだ。嫌な予感がして部屋に逃げ込もうとした俺だったが、あっけなく捕まって気付けばこの有様だ。

車を汚されたくないからとおむつを履かされている。身じろぐたびに溢れた愛液がくちゅくちゅ鳴っていた。普段はかっこつけた洋楽を流しているくせに、なぜか今日の車内は無音で、水音と俺の喘ぎ声がいやに響く。